

説教 『創造の量と質』山本 護牧師

聖書 ホセア書 2:1~3 / ヨハネによる福音書 10:14~16

讚美歌に「幾千万の母たちの、幾千万のむすこらが」と歌われるのはどんな人たちか、と思ひ描く。広義には全時代の戦争を捉えたものかもしれないが、リアルなのは先の太平洋戦争のことだろう。連想から「ひさしぶりに手を牽いて」という歌詞が口をついて出た。私の出生年に島倉千代子が歌った「東京だよ、おっ母さん」だ。戦後、東京で働く娘が、田舎のおっ母さんを連れて皇居、靖国神社、浅草と案内する。二重橋では天皇を拝し、九段坂では神に祀られた息子(兄さん)を拝し、「お祭りみたいに賑やかね」の浅草では観音様を拝して悲痛を納めようとする巡礼なのかもしれない。あの時代の、神仏習合している日本の「幾千万の母たち」とは、このようなおっ母さんだったかもしれない。

戦争は、殺される者はもちろんのこと、遺される母や近親者にも苦しみをもたらす。それが幾千万もの数にもものぼる、とんでもなく悪なる所業だ。ただ実際には、母ごとそれぞれの悲痛の「質」は異なるだろう。しかし幾千万件を数えると「東京だよ、おっ母さん」のように類型化されてしまう。

神は、人間の数がいくら多くとも類型化したりしない。「イスラエルの人々は、その数を増し、海の砂のようになり、量ることも、数えることもできなくなる(ホセア 2:1a)」。それでも「彼らは〔あなたたちは、ロ・アンミ(わが民でない者)〕と言われるかわりに、〔生ける神の子ら〕と言われるようになる(2:1b)」。人間には、膨大な数の「質」は掴みえない。だが生きて働かれる神は、人間が海の砂のようであっても「我が子」として見つめ、私たち一人ひとりを各々生きる仕方に応じて養ってくださる。

イエスは自らをこう表明された。「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている(ヨハネ 10:14)」。羊である私たちは、羊飼いイエスに知られている。どのように知られているのか。「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す(10:3)」。名がつけられるほどに個々の違いが知られ、各々の姿に応じて大事に養われている。「名」とは一人ひとりの「質」そのもの。決して「量」に置き換えることはできない。戦力や経済力、犠牲者の総量は計測できる。しかし犠牲者の「質」は測ることができない。良い羊飼いは羊を数えることより、各々の「質」として養うことに熱心だ。

羊飼いは羊を余裕綽々で養っているのではない。「わたしは羊のために命を捨てる(10:15)」と十字架を決意させるほど、ぎりぎりで養っている。良い羊飼いは命懸けで羊を守る(10:11)。更に、それで終いではない。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける(10:16)」。教会は、ここに集められた私たちだけで構成されるものではない。声を聞き分ける未だ出会っていない兄弟をも含めて教会の範囲なのである。

「あなたたちは兄弟に向かって〔アンミ(わが民)〕と言え。あなたたちは姉妹に向かって〔ルハマ(憐れまれる者)〕と言え(ホセア 2:3)」。囲いの中にいる姉妹も、未だ出会っていない囲いの外の兄弟も、キリストなる羊飼いに導かれ、同じ「わが民」となる。海の砂のように膨大であっても(2:1)、一人ひとりが各々の「名」で呼ばれる「生ける神の子ら」なのだ(2:1)。伝道は、神の子ら同士の、いわば再会。



【おまけのひとこと】

海の砂の一粒である私が 広い浜からでも見出される 主は 人を創りつ放しにはなさないから
私の世界は 周囲に接している数十の砂粒が精一杯 生涯を通して数えたとしても千粒程度だろう